

ミリアム・トリン博士 (Dr. Miriam Trinh) 特別講演

## 偉大なイディッシュ語作家の壮絶な悲劇：

アヴロム・スツケヴェル 1913 (スモルゴン) -2010 (テルアヴィヴ)

The Great Trajectory of a Great Yiddish Poet: Avrom Sutzkever 1913 – 2010

講演の本文訳：鴨志田 聡子、詩の訳：田中 壮泰

本日の東京大学での講演をはじめの前に、まず現代文芸論研究室の沼野充義教授と言語学研究室の鴨志田聡子博士をはじめ、今回の招聘のためにご尽力くださったたくさんの皆様に感謝したいと思います。またイディッシュ語とその文化に世界的な関心があるということを実証していただきました、本日の聴衆の皆さん、学生の皆さん、研究者の皆さんに感謝したいと思います。

アヴロム・スツケヴェル (Avrom Sutzkever) の生年と没年と場所を見てください。歴史的、地理的な悲劇が、スツケヴェルの個人的、文学的な経歴を物語っています。

彼は現代イディッシュ語文学において最も偉大な作家でした。97年間にわたる彼の人生を一時間に凝縮するのは無理ですので、本講演は彼の人生と作品についての入門編の紹介に留めます。私はこれを機にみなさんがイディッシュ語を勉強し、スツケヴェルというものすごい作家についてもっと掘り下げてほしいと思っています。

スツケヴェルの創作は、彼が生きた時代とその人生とに非常に関係があります。これを次の三つの時期に分けてお話しします。まず一つ目は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期です。スツケヴェルは幼少期と青年期をヨーロッパで過ごしました。二つ目は、ホロコーストの時期。三つ目はホロコースト後の時期です。

一見、この三つの時期の分類はスツケヴェルのホロコースト体験によってなされているように見えます。けれども、私はスツケヴェルを単なるホロコースト作家と見るべきではないと考えています。彼や彼の周囲の人達のホロコースト体験がスツケヴェルとその作品に非常に大きな影響を与えていることは確かです。それと確認ですが、スツケヴェルは詩

人です。散文も書いているのですが、そのほとんどが非常に詩的なものです。

では、彼の悲劇をたどりましょう。

スツケヴェルは、1913年7月15日にスモルゴン（当時はロシア帝国の一部で、現在ベラルーシのSmorhon）で生まれました。イディッシュ語ではこの地域は伝統的にリテ(Lite)と呼ばれます。スツケヴェルはリトアニア大公国出身のユダヤ人、すなわちリトヴァック(Litvak)でした。これは彼のイディッシュ語にも作品にもはっきりと現れています。第一次世界大戦中にロシア人がスモルゴンに住んでいたユダヤ人を追放し、町を焼きました。スツケヴェルは両親と二人のお兄さんたちと一緒に東へ逃げ、一家でシベリアのオムスク(Omsk)で暮らしはじめました。彼の父ヘルツは大変な知識人で、音楽を愛しヴァイオリンを弾くような人でした。そんな父は森で働いていたわけなのですが、まだ小さかったスツケヴェルはそのそばで、美しい自然の中を歩き回ってみたいと思います。シベリアという地名には陰気で憂鬱な雰囲気が漂うのが一般的ですが、スツケヴェルにとってそこは牧歌的な美しさと静寂、そして完全な調和のある場所でした。幼少期の彼は平和な家族の時間、そして広大な自然の中での絶対的な自由を体験しました。その中で彼は精神を育み、感性と想像力を磨きました。雪で真っ白になった冬のシベリアで、スツケヴェルは自然と創造の力、そして創造の美を感じました。幼い時期に神秘的な経験をして得たインスピレーションは、彼の初期の作品に影響を与えている他、自分の詩から神話を創造するという、彼のメタポエティクスの基盤となっています。

スツケヴェルの経歴と作品の関連性について伝えるため、彼がシベリアでの幼少期について書いた作品を朗読します。

### 認識 [Derkentnish]

1

「お父さん、世界の果てはどこにあるの？」と  
 哲学者みたいにぼくは<sup>パシエイド</sup>答えを知りたがった。  
 その答えというのが、「お山の<sup>ハテ</sup>てっぺんにある小屋の  
 その向こう、太陽が<sup>ファルゲイト</sup>沈むところだ」という。  
 お父さん、それはほんとう？ もしそうなら<sup>ケレルン</sup>考えるのはやめて  
 日没を<sup>ロイフ</sup>追い越してやれ！ と、ぼくは走る。

銀色に輝く<sup>トレン</sup>涙の網を越えて  
世界がそこで果てるという山を<sup>ア</sup>駆け<sup>ロ</sup>上<sup>イ</sup>が<sup>フ</sup>った。  
両目はシベリアの神さまに向けてお祈りした  
ぼくの期待が<sup>ウムジスト</sup>外れることなんてありませんように。  
古い年月が、何百万もの年月が  
<sup>サイ・バグリスト</sup>ようこそと、吹きつける雪で歓迎してくれる。

2

ぼくの背後で、お父さん<sup>タ</sup>は<sup>テ</sup>小さな点になった。  
高鳴る心臓が、太陽に向かって走<sup>ガ</sup>って<sup>ロ</sup>ゆ<sup>ブ</sup>く。  
ようやく小屋の前までやってきた！  
高ぶる<sup>ロスト・ニト・オブ</sup>気持ちが<sup>シヤイテル</sup>急き立<sup>テ</sup>てる。  
ぼくの唇は、<sup>シヤイテル</sup>焚き火が照らしている  
ごうごうと唸りをあげる<sup>ドノ</sup>谷底へ、吸い寄せられる  
お父さん！ 世界は<sup>ヴァイテル</sup>まだ先に<sup>ニト</sup>広がっているよ  
果て<sup>ニト</sup>なんかない、どこにも<sup>ニト</sup>ないじゃないか。  
お父さんは聞いていない。青い<sup>グリネ</sup>星々が流れ落ちる。  
お父さんは見ていない、少年だったぼくが突如として  
光と驚きからなる  
<sup>ラヴィネ</sup>雪崩になるところを。

しかし、シベリアは彼の最初の悲劇の場でもありました。1920年に父親ヘルツが心臓病で亡くなったのです。これを受けて母親のレイナはすぐに3人の子どもを連れてヴィルナ（現在のリトアニアの首都ヴィリニウス）に行きました。彼のシベリア時代は悲劇的な終わり方をしましたが、スツケヴェルはその土地への愛を失いませんでした。むしろ、愛する父と一緒に過ごせたのはシベリア時代だけだったので、その時期はスツケヴェルにとって大切でした。長年、彼は父親の思い出を作品の中心にすえました。そして、いずれも作品に父親が現れれば、それは平和と調和、そして創造と美を象徴しています。

ヴィルナでスツケヴェルはまず、タルムード・トーラー（Talmud-Torah）に通って宗教教育を受けました。その後、ユダヤ系のギムナジウム（高校にあたる）で学んだのですが、そこでの教育言語はポーランド語でした。この青年期にスツケヴェルはポーランド

文学についての知識を深め、それを愛するようになりました。これが初期の作品に大きな影響を与えました。特に、彼はポーランドのロマン派の詩人ユリウシュ・スウォヴァツキ (Juliusz Słowacki) と、さらに神秘的な作家ツィプリアン・ノルヴィッド (Cyprian Norwid) を敬愛しました。スツケヴェルのイディッシュ語の詩には、コウノトリが象徴的な意味合いをもって出てくるのですが、これもスウォヴァツキの影響です。スウォヴァツキは祖国ポーランドへの郷愁を抱いていたのですが、コウノトリはその典型でした。ノルヴィッドの作品で、スツケヴェルは翻訳者としての腕試しをしました。スツケヴェルが自分で企画、出版した翻訳作品のはじめの三つがノルヴィッドの「ショパンのピアノ」 (*Fortepian Szopena*)、「私のうた」 (*Moja piosnka*)、「時の美」 (*Piękno czasu*) でした。ちなみに彼が翻訳作品を出版することはまれでした。

スツケヴェルはポーランド語で教育を受けたのですが、彼の母語も第一言語もイディッシュ語でした。とはいえ、彼にはイディッシュ語文学についての知識はそれほどありませんでした。スツケヴェルはディ・ビン (Di Bin, The Bee) というイディッシュ・スカウト運動に加わります。これは YIVO (東欧ユダヤについての研究所で、もともとヴィルナで創設された。現在本部はニューヨーク) のリーダーであり、イディッシュの言語と文化の最も重要な学者の一人マックス・ヴァインライヒが 1920 年代に設立した運動です。スツケヴェルは現代のイディシズム (イディッシュ主義)、世俗的ユダヤ人の日常の言語としての現代イディッシュ語の重要性について学びました。その後、彼は現代イディッシュ語文学の豊かさ、特にイディッシュ語詩のそれに目覚めました。そこでイディッシュ語の歴史を学び、YIVO の一員になり、成果として古イディッシュ語様式の短い詩のシリーズを創作しました。

1920 年代末にヴィルナで「ユング・ヴィルナ (若きヴィルナ)」というイディッシュ語文学のグループが設立されました。メンバーは若いイディッシュ語作家と芸術家たちでした。このグループのメンバーたちは、共通の理論やイデオロギーのもとに集まっていたというよりは、同じような社会や環境に属しているのを理由に集まっていた。彼らのほとんどはユダヤ人の労働者階級として、経済的に貧しい環境で育ちました。そしてこういった背景から、「芸術は芸術それ自体を目的に作られてはいけない」と考えていました。芸術が社会に関わる必要があると考えていたのです。彼らの考え方を考慮すれば「ユング・ヴィルナ」のメンバーのほとんどが社会主義や共産主義の運動にシンパシーを感じていたのも不思議でもありません。

スツケヴェルが詩人として歩み出したのは1920年代でした。初期の詩はポーランド語とロシア語の現代文学の影響を強く受けていました。スツケヴェルはこれらの作品をオリジナルそして翻訳で読んでいました。初期の作品は、深みある審美的で内観的な、最も純粋な自然詩として特徴づけることができます。この時期の作品ではスツケヴェルが自分自身について考え、自然の美というものを捉え、どう詩的に表現するか悩んでいたことがわかります。

ヴィルナの文学者になるには「ユング・ヴィルナ」の一員として認められる必要がありました。しかし、スツケヴェルの詩は「ユング・ヴィルナ」の世界観に合っていませんでした。ここは大事なところです。「ユング・ヴィルナ」の一部のメンバーとスツケヴェルは個人的な友情で深く結ばれてはいたのですが、1930年代にグループが盛り上がっていたときはスツケヴェルは周辺的な存在でした。

1930年代、スツケヴェルは個人的に活躍しており、詩と韻律に大変優れた作家として非常に有名になりました。イディッシュ語作家で海外でも有名になった人というのは彼が初めてです。アメリカでのイディッシュ語現代詩の運動は、スツケヴェルを歓迎しました。彼らは『内省』(*In Zikh*)という雑誌でスツケヴェルの作品を出版し、彼の名前とその内省力と審美眼を広めました。

1937年、スツケヴェルは彼の最初の詩集『詩』(*Lider*)を出版し、ワルシャワで、完璧な水準を目指して自身の詩を磨き続けました。スツケヴェルは1940年代の初めになってもそれを続けていました。この頃はもうポーランドがナチの支配下にあって、ポーランドのユダヤ人たちがゲットーに閉じ込められていた時代でした。ただし、ソヴィエト連邦に編入される前まで、短期的にヴィルナはリトアニアの一部になっていました。そこでスツケヴェルは二冊目の本『森』(*Valdiks*)を出版しました。ちなみにこの作品はB.ハルシャヴによって『森から』(*From the Forest*)として翻訳されています。ハルシャヴは、この作品を「イディッシュ語のクリスタル」としています。東ヨーロッパにいたユダヤ人たちにとっては非常に大変な時代だったのですが、そんな中でもスツケヴェルは詩において、可能な限り自己中心的でいました。

## 森 [Valdiks]

目にうつるものすべてに価値がある  
 わたしの言葉<sup>ストロフ</sup>にとっては、どれも貴重で上等だ  
 草花も、木々も、大地も、泉も、水筒<sup>ロケル</sup>も  
 遠く<sup>シュロフ</sup>の色彩豊かな眠りの光景も。  
 わたしはあらゆるものの中で  
 無限<sup>インソフ</sup>のかけらと出会うのだ。

白樺<sup>ベリオーゼ</sup>のなかにわたしは己が肉体を見る  
 バラ<sup>ロイズ</sup>の開花に己が血潮を感じる  
 この自然<sup>メタモルフオーゼ</sup>の変身<sup>シュロフ</sup>でもって  
 わたしは知<sup>ホイズ</sup>の家を紡ぐのだ  
 あらゆるものから、わたしの主が  
 深く大きく顕現<sup>グロイヌ</sup>する。

ただのごみが寛容さを語り  
 静かな水滴<sup>グノド</sup>が輝かしい品性を語り  
 林檎<sup>ソド</sup>たちは白く孤立した果樹園への  
 聡明な愛を伝えているように  
 どんな瞬間もそこに歌がともなわなければ  
 それは喪失<sup>シヨド</sup>と同じこと。

わたしが感じるものはすべて、わたしに属している。  
 わたしの言葉が届く場所はどこにでもわたしは存在<sup>フアラシ</sup>している。  
 砂漠のなかの泉のように喜びがほとぼしり  
 わたしの人生<sup>カラバン</sup>の隊商を引っぱり込む。  
 ありとあらゆるものすべてに  
 わたしの歩み<sup>シュバン</sup>の跡が刻まれている。

スツケヴェルは非常に内省的で自然に焦点をあてていた、というかむしろ自然に服従していたと言った方がいいかもしれません。でもそんな彼の視点は、自身のホロコースト

体験によって劇的に変化します。まずはヴィルナのゲットーにおける最初の何年か、そして次はヴィルナ郊外にあるポナール（Ponar）の森で彼がバルチザンだったときです。スツケヴェルは、ポナールの森で起こった大量殺戮で母親を失いました。生まれたばかりの息子もゲットーで失いました。スツケヴェルの個人的な運命は、集団としてのユダヤ人の運命の一部でもありました。個人的な犠牲の体験は、ユダヤ人の絶滅を見つめるスツケヴェルの目と心を更に鋭くしたのです。彼の中に新しい葛藤が生まれました。自分自身の詩の世界についての葛藤です。こんな時期に自己中心的で、牧歌的で、審美的な視点は、不可能であるし、道徳的にも容認できないのではないだろうかと悩みました。その一方で、スツケヴェルは詩の世界のもつ力に打ち勝つことはできませんでした。詩を神的なものとして信仰していたのです。

スツケヴェルはホロコーストの間、肉体的にも精神的にも生き延びるために、詩の創作にしがみつきました。そして彼の創作は新しい使命を負い、彼は単なる詩人ではなくユダヤの詩人となったのです。これは彼自身のため、そして、周りの人々のためでもありました。

彼はこれまで通り最も洗練された詩的な表現を探し続けました。でも、完璧さの尺度が以前と変わりました。死に絶えそうなユダヤ人の世界を単に描写するのではなく、それにティクン（Tikkun、道徳的な矯正）を与え、記憶を存続させ、その世界を生かそうとしたのです。彼の詩は単にホロコーストを思い起こさせるだけではありませんでした。それ自身がユダヤ的な形をしていました。ここで初めて伝統的なユダヤ人のモチーフが増えてきます。

### モーセ [Moyshe]

<sup>ドレムル</sup>  
眠る赤子を胸に抱き  
ぼくの方へ羽ばたいてくるあの女は何者か？  
ヴィリヤ川<sup>1</sup>の岸へと女は羽ばたき  
その胸には子どもを、ひとつのゆらめく<sup>フレムル</sup>炎を抱いている。

女は岸に駆け寄り、<sup>ヴァイリエ</sup>ヴィリヤ川に飛び込むと  
どよめく<sup>シュトロメン</sup>奔流に飲み込まれた。  
子どもは<sup>クリエ</sup>流水に乗せ

自分は奈落の底へと沈んでいった。

ナイル川からヴィリヤ川まではどれくらい遠いのか？  
 一日、また一日が同じ水のなかを過ぎていく  
 そんな永遠への恐怖が、習慣を一新してくれる  
 人はそれを忘れるべきではない。

女は最後の瞬間まで指を伸ばし  
 日没をつかみ奈落の底まで道連れにした。波が女を流し去る  
 勢いよく、そして軽やかに  
 その岸辺に、わたしはひとつのしるしを残した。

春に流氷が贈り物を届けてくれた  
 凍つく涙のなかでまどろむ子どもを。  
 わたしはその子を月まで連れてゆき  
 こう語りかけるのだ：新たなモーセになるのだよ！

1945年4月15日、ヴィリニユスのゲッターにて。

さてモイシェ（モーセのイディッシュ語読み）はユダヤ人のリーダーでした。モイシェを登場させることで、詩にユダヤ性を帯びさせただけではなく、スツケヴェル自身が「世界のリーダー」または預言者であるというメッセージを込めました。みなさんご存知のことと思いますが、詩の伝統として自己同一性というものがありますが、これは預言的な力とも関係があります。

スツケヴェルはホロコースト体験を通じて、ユダヤ人の詩人または預言者になること以上の新しい使命を引き受けました。それは失われた「彼の」ユダヤ人の世界、つまりイディッシュ語の世界の詩人になることでした。スツケヴェルはイディッシュ語の文化のために働き続けねばなりませんでした。彼の詩的世界を通じてイディッシュ語の豊かさ、美しさ、深さ、そして生命力を維持しようとしたのです。ゲッターにおいてスツケヴェルは執筆だけではなく、救出活動を行いました。つまりユダヤやイディッシュ語の文化や宝を保護したのです。宝というのはつまり世俗的な本や宗教的な本、そしてヘブライ語とイディッシュ語の写本です。ナチがこれらをヴィルナのゲッターにいたエリー



ト知識人たちを使って選別、収集し、ドイツの「ユダヤ博物館」に送ろうとしていました。スツケヴェルは他の学者たちと一緒に強制的にその作業をやらされていました。なのでこれに抵抗するために、非常に多くの宝をゲッターの中に隠しました。

1943年にヴィルナのゲッターが解体されると、スツケヴェルは妻のフレイドケと一緒に近くの森に避難してパルチザンとなり、書き続けました。そしてある日彼らは信じられないような方法で救出されました。なんと、ソヴィエト政府が自ら飛行機を送って、彼らを救出したのです。この例外的な作戦は、ロシア語とイディッシュ語で書いていたソヴィエトのユダヤ人作家たちによるものでした。彼らはユダヤ人反ファシスト委員会のメンバーとして特権をもっていました。そこで、最も素晴らしいイディッシュ語詩人であるスツケヴェルを救出することは、非常に大事だと主張して、スターリンを説得したのです。スツケヴェルと彼の妻は直接モスクワに移送されました。

1944年、スツケヴェルはヴィルナに戻りました。ユング・ヴィルナの友人シュメルケ・カチェルギンスキ（Shmerke Kaczerginski）他何人かの生存者と一緒にユダヤ博物館を作りました。

ここではユダヤ人の生活を続けられない。これに気がついたスツケヴェルはヴィルナを後にします。スツケヴェルはワルシャワでポーランドに詩で別れを告げました。「ポーランドへ」(Tsu Poyln)という詩です。この作品では、前述のポーランドのロマン派の詩人ユリウシュ・スウォヴァツキの国民的作品「聖歌」(Hymn)について言及しています。スツケヴェルはイディッシュ語で書いた「ポーランドへ」の最後を、スウォヴァツキの「おお神よ、わたしは悲しい！」(Smutno mi Boże!)というポーランド語で締めくくっているのです。

1946年、スツケヴェルは第二次世界大戦後の国際軍事裁判の際ニュルンベルク裁判において証言者となったのち、数ヶ月間パリに住みました。そして1947年の秋にパレスチナに行きました。ここでまたしても、スツケヴェルを助けたのは政治的な人脈でした。ハイファには第二次世界大戦開戦の時期からすでに兄のモイシェが住んでいました。スツケヴェルはゴルダ・メイヤ（後にイスラエル首相となる女性）が彼のために偽造した書類のおかげで、兄と合流することができました。

スツケヴェルは新しくしかも古い土地について探究しました。彼は第二次世界大戦の前にも、ホロコースト下においてもいわゆるシオニストにはならなかったのですが、イ

スラエル国家に受け入れられました。ホロコーストを生き延びたユダヤ人たちには、イスラエルにルーツを感じるという傾向がありました。スツケヴェルは個人としても落ちついて、家族との生活を立て直すための場所を探していました。自分がそこに住むことで集団的記憶をつなげようとした。彼はとくにホロコーストの後イディッシュ語の詩的表現でユダヤ人の歴史の永続性を追求しました。スツケヴェルはイディッシュ語詩人として、新しくかつ古い自分たち民族の土地において、一度失われた集団を再び繋げようとした。イディッシュ語詩人として生き証人になることが、彼にとって自分の存在意義だったのです。

しかし、新しく建国された国家においてイディッシュ語という言葉とその文化を大々的に掲げることは歓迎されませんでした。スツケヴェルはヴィルナ最後の日々、イディッシュ語の詩と奮闘したのですが、イスラエル国家はイディッシュ語と奮闘していました。

#### イディッシュ [Yidish]

最初から始めるべきなのか？

アブラハムのように

共同体からすべての偶像を破壊すべきなのか？

そして生きているものと取り替えるべきなのか？

舌を植えて

父祖の時代の

アーモンドとレーズンに

育つまで待つべきなのか？

なんて愉快的冗談なんだろう

髭づらの詩人仲間たちが

わたしの母語がやがて滅びると

そんな説教をするなんて？

百年後もわたしたちはそこにどっかと腰を据えて

ヨルダン川の畔で同じ議論をしているだろう。

なぜなら、こんな疑問が牙を剥き、爪をたてるからだ：

もしベルディーチェフ<sup>2</sup>の祈りが

イエホアシュ<sup>3</sup>や

クルバク<sup>4</sup>の詩が

没落に向かって  
さまよっている場所を  
ご存知だというのなら  
だったら、わたしに  
言語が落ちていく方向も指し示すべきではないのか？  
それは嘆きの壁のもとだろうか？  
もしそうなら、わたしはそこへ行こう  
口を大きく広げて  
ライオンのように  
激しい炎を身にまとい  
没落しつつある言語を貪り尽くしてみせよう。  
そして、わたしの雄叫びですべての世代が目覚めるのだ！

1948年

スツケヴェルは『黄金の鎖』(*Di Goldenekyt*)の編集長になりました。これは世界で最も重要なイディッシュ語文芸雑誌で、1948年から1990年代までイスラエルのテルアヴィヴという都市で出版されました。出版にはイスラエルの労働総同盟ヒスタドゥルートのバックアップを受けていました。スツケヴェルは、イスラエル国内のみならず国外でもイディッシュ語を使い続けました。執筆言語をイディッシュ語からヘブライ語にかえる作家はいましたが、スツケヴェルはヘブライ語が流暢だったにもかかわらず、それをしませんでした。

1950年代のイスラエルでは、イディッシュ語主義者には政治的逆風が吹いていました。そんな中、スツケヴェルはイスラエルで執筆した詩集『火の馬車で』(*In fayervogn*)を出版しました。彼は物理的に新しい故郷に到達したのですが、詩でこれを定義しようとしませんでした。こういうのは詩でないとできなかつたのかもしれませんが。こうして彼の詩はイスラエルでの新生活の中で輝きます。

ところでスツケヴェルは以前から自然への情熱をもっていました。これは新しい風景の中で彼にとって「聖なる」言語で、大好きな言語イディッシュ語に具現化されています。以前はシベリアの雪やヴィルナの緑の森が周りにありましたが、イスラエルにあるのは火のように燃える砂漠の大地で緑もまばらです。

スツケヴェルは五十年間頑張り続けました。とくにイスラエルにおいて、自分自身でイディッシュ語の単語を洗練させました。そして必死で新しい詩のスタイルを手に入れようとしました。アフリカのイディッシュ語作家を訪ねて行って、アフリカの文化に興味を持ったこともありました。時にはイスラエルの問題や不合理さ、パラドックスを描写し、また時には散文を書くなどジャンルを変え、試行錯誤しました。

しかし、最後の最後までスツケヴェルは「道半ば」でした。ずっとペンを離しませんでした。次の点において、完璧に仕上げた作品はなかったのです。過去と未来、究極の美、完璧、忘れがたい残虐行為、古い家と新しい家、古い言語・文化と新しい言語・文化、そして古いスツケヴェルと新しいスツケヴェルについて。

彼がイスラエルで新移民だったときに書いた詩に「ヘロモン山の雪」という作品があります。その後スツケヴェルは人生の大半をイスラエルで過ごします。詩人としてのキャリアの最後に、ぞっとするようなことに執着します。「自分は任務を遂行していない。誰が残るんだろう、何が残るんだろう、くだらないことばたち以外に？」

#### 1974年の日記から

誰が残り、何が残る？ <sup>ヴァイント</sup>風が残るだろう  
 盲者が去った後<sup>ファルシュヴァイント</sup>に盲目が残るだろう。  
 海が退いた跡には泡のネックレスが残るだろう。  
 ちぎれ雲が木<sup>ボイム</sup>に引っかかって残るだろう。

誰が残り、何が残る？ <sup>トラフ</sup>言葉が残るだろう  
 草木を生やしたあの原初<sup>パンシャフ</sup>の創造を行う言葉が。  
 バラ=バイオリン<sup>フィドルロイズ</sup>は誇らかに残るだろう  
 七本の草が弦となりその音を奏でてくれるだろう。

北の夜空から<sup>アヘール</sup>落ちてくる無数の星々のなかから  
 涙<sup>トレル</sup>となって流れ落ちるひとつの星が残るだろう。  
 水差し<sup>ケルグ</sup>のなかに一滴のワインが残りつづけるだろう。  
 誰が残るかといえば、神<sup>ゲヌグ</sup>が残るだろう、これで十分ではなからうか？

これは2016年10月17日(月)に科研費研究プロジェクト「越境と変容—グローバル化時代のスラヴ・ユーラシア研究の新たなパラダイムを求めて」および科研費研究プロジェクト「イスラエルのユダヤ人の言語的多様性：ユダヤに内包されたイスラームの研究」の一環として開かれた、ミリアム・トリン博士の講演です。

---

注

1. ベラルーシに源を発するネマン川の支流でヴィリニウスを流れる。
2. Levi Yitzchok Berditchever (1740-1809)：18世紀に活躍したハシディズムのラビ。イディッシュ語の詩や小説に数多く描かれ民衆に愛された。
3. Yehoash (1872-1927)：ニューヨークで活躍したヴィリニウス出身のイディッシュ語詩人。
4. Moyshe Kulbak (1896-1940)：スモルゴン(現ベラルーシ)に生まれ、ヴィリニウスとミンスクで活躍したイディッシュ語作家。スターリン時代に粛正された。

講演者について

ミリアム・トリン博士は、エルサレム・ヘブライ大学(イスラエル)でイディッシュ語文学および東欧ユダヤ文学を研究し、イスラエル国内外のイディッシュ語の語学講座で教えてきました。同氏はポーランドで生まれ、ドイツで育ち、19歳でイスラエルに移住しました。主な研究テーマは東ヨーロッパにおけるユダヤ人の文学で、エルサレム・ヘブライ大学で博士号を取得しました。ヘブライ語、ポーランド語、ドイツ語の文学作品をイディッシュ語に翻訳している他、イディッシュ語の出版プロジェクトにも携わっています。

## 解説：アヴロム・スツケヴェルの詩の重層性

鴨志田 聡子

さて、こちらはミリアム・トリン博士が早稲田大学文化構想学部（文芸・ジャーナリズム論系）における講演「あなたはイディッシュ語を知っていますか？」で紹介したアヴロム・スツケヴェルの詩です。

「感謝の祈り」 ["Shehekiyonu" / You give us life]

アヴロム・スツケヴェル作、鴨志田 聡子訳

ぼくは君とでなければ  
ここで幸せも痛みを感じない  
ここと燃えなければ  
火山の地の産みの苦しみ

犠牲を経て今  
ここと生まれなければ  
ここの小石はぼくの先祖

パンはお腹を満たさない  
水はのどを潤さない  
ゴイになってここを去っても  
郷愁だけは戻って来る

1947年

この詩には、ユダヤ的なものとヨーロッパ的なものが混在し、独特の連続性を形成しています。一行目の「君」とはスツケヴェルが作品に登場させる霊的なミューズだといわれています。「故郷」イスラエルにやってきたスツケヴェルは単に幸せだったわけではあ

りませんでした。新たに自分たちの国家とその国の言語現代ヘブライ語をつくるという産みの苦しみが伴いました。

詩の中でツケヴェルは旧約聖書の時代、ホロコースト、イスラエル建国と、異なる時代と場所のユダヤ人たちの「犠牲」に連続性を持たせています。「故郷」イスラエルで彼は、自分の先祖がここから来たと感じていたようです。これ以外のものは彼を満たせませんでした。なので「ゴイ（異教徒）」になって、つまりユダヤ人であることをやめてイスラエルから出て行っても、自分の郷愁だけはそこに舞い戻ってきてしまうとのことでした。

この詩の原作の言語イディッシュ語は借用語が多いゆえ、類義語が豊富です。一つのことを意味するのに、ドイツ語風にも、スラブ語風にも、ヘブライ語風にも言えます。語彙の八割程度はドイツ語だと言われているが、ユダヤ人がかつて住んでいたスラブ語圏の語彙や、ユダヤ人の宗教や生活に必要なヘブライ語の語彙が多く含まれています。多くの言語においてそういうことがあるように、作者の言わんとするところを知りたいければ、単に単語の意味だけではなく、その背景をよく知る必要があります。

ツケヴェルのこの詩でも、「君」は誰のことなのか、「火山」がなんのことなのか、「小石」がどうしておじいさん（先祖と訳しました）なのか、私はこれをどう日本語にしたら良いのか頭を悩ませました。ミリアム・トリン氏とのやりとりを経て（イディッシュ語で解説してくれました）ある程度までわかりましたが、まだすっきりしません。

ツケヴェルは「ヨーロッパ」の自然を原風景とし、そこで育まれたイディッシュ語を母語とし、創作の言語としていました。地中海沿いの砂漠の地イスラエルの自然は彼の原風景とは異なり、現代ヘブライ語は彼の創作の言語ではありませんでした。しかしツケヴェルはその土地に「郷愁」を感じ、そこと自分の原風景に連続性をもたせようとしています。

ツケヴェルは韻と類義語によって、一つ一つの単語とそれぞれの関連性に重層的な意味を持たせています。例えば、三行目の（vey do、痛み ここ）と四行目のヘヴレイレド（hevley-leydo、生みの苦しみ）においてです。前者はドイツ語からの借用語です。これはヨーロッパからのつながりを示しています。後者はヘブライ語のイディッシュ語読みです。後者の「産みの苦しみ」には、国家を建国し、新しい言語をつくる「お産」の激痛が表現されています。五行目のアケイデ（akeyde、旧約聖書における「イサクの生贄」のこと。ホロコースト、建国時の戦争の犠牲もこれに重ねている）はヘブライ語からの借用語、七行目のゼイデ（zeyde、おじいさん、先祖も意味する）はスラブ語からの借用語です。異なる言語からの借用語が、イディッシュ語として韻を踏んでいます。ツケヴェルは旧約聖書時代から離散を経てイスラエル国に至ったユダヤ人とその土地の連続性を、

イディッシュ語で表現し続けました。現代イスラエルの作家でありながら、ヘブライ語ではなくイディッシュ語で奮闘したスツケヴェルの葛藤と苦悩を詩の中に垣間見ることができます。